

Just Now

外国語活動におけることば・文化 に対する知識の共有： ことばの楽しさ、広がり、深さと

兼重 昇 Kaneshige Noboru
(鳴門教育大学)

1. はじめに

♪ One, two, three, four, five, six, seven, ... ♪

児童の楽しい歌声が教室から聞こえ、外国語活動の楽しさが表れているとあっていいかもしれない。しかし、これだけで終わってしまったら、高学年を対象として行われる授業としては何かもの足りない。だからといって、基本的な数字や動物の名前などを扱わないというのではない。

本稿では、テーマや扱う材料は簡単でも、それに深みや意味を持たせることで、ことばや文化に対する意識を深め、学習意欲を高める内容の扱いについて紹介する。

2. 数からはじまることばの広がり

「一、二、三」これを日本語で読むと、「いち、に、さん」と読むことができる。また「ひ、ふ、み」とも読むこともできる。どうして日本語は2つの読み方があるのだろう。これは、韓国語も同じである。「イル、イ、サム」「ハナ、トゥル、セッ」がそれにあたる。

ここまで聞くと「ハッ!」と気づく児童もいる。「いち、に、さん」「イル、イ、サム」がよく似ていることである。実は、これは中国語の「イー、アル、サン」から由来するもので、もう一方の「ひ、ふ、み」「ハナ、トゥル、セッ」は、それぞれの言語古来の数え方である。教師の話聞いて児童の「へえ～」につながっていく。

次に「壹、貳、参、肆、伍、陸、漆、捌、玖、拾」。これらを順番に並べてみようという活動をする。困

惑する児童。しかし、なかには音を参考に、漢字の一部を参考に並べてみようとする。これらはそれぞれ「一、二、三、...、十」を表す漢数字である。現在は特殊な場面でしか利用されないし、小学校で学ぶ漢字には含まれていないものである。しかし、児童にとっては身近な漢字だけでなく、違う書き方もあることを知るよい機会になる。

3. 外国語活動の時間でなくても…

上にあげた内容は、外国語活動の中で取りあげなくてもいいのではないかという意見があるのもともである。限られた外国語活動の時間枠で扱わなくとも国語やその他の教科・領域で扱うこともできる。しかし逆に解すと、それこそが小学校における外国語活動のねらいでもあるといえる。児童の身近な事柄や実態にもとづき、学習内容の関連を図ることが、児童とことばとの距離を近づけることになる。距離の近いことばは、教師から与えられた距離の遠いことばと比べて、繰り返しの機械的な活動であっても、その質が異なってくるのである。

またこうした内容に関して、例えば最初の例は導入部分での扱いとして利用すればよいし、2つ目の例は数字の1～10の代わりにピクチャーカードとしての利用と解釈していただければよい。教師のひと工夫で授業内容に広がりや深みが増し、知的好奇心を刺激された児童は次の学習への意欲を高めることとなる。

4. どのような情報が必要か？

それでは、どのような情報が必要であろうか。これは教師が考えるものと児童から発生するものと両

方から考える必要がある。私は、教師の情報提供はあくまでも以後の児童の興味・関心を促進していくものであって、児童の「これを知りたい」「言ってみよう」という気持ちを大切にしていきたいと考える。前述の例でも、外国語の数字の数え方を覚えるため、漢字を覚えるため、ではなくて、これから先の児童の自律した学習へ向けて「他のことばでは何と言うのだろうか?」「日本語では他にはどういう表現があるのだろうか?」という問いかけを促すものであってほしい。

「ハッ!」→「へえ〜」→「もっと知り(言)いたいな」への一連が学びを進めていくための望ましいかたちの1つであろう。

ことばや文化は、完結するものではなく無限に広がっているものである。そのきっかけを小学校での外国語活動で体験していくことが大切である。

ただし、きっかけをつくる手がかりは必要である。各出版社による小学校英語活動のための副読本・テキスト(例えば三省堂 *KIDS CROWN*)は参考になる。また文部科学省で用意しているとされる「英語ノート(仮称)」にも期待したい。もちろん小学校では学校そのものが最も適した教材・教具であるといわれているように、学校生活からそのきっかけを見つけていくのもよいであろう。

5. 児童の知りたいこと・言いたいこととは

次の例はALTとの交流で児童が質問をしていた場面である。

児童: What color do you like?

ALT: I like red and black.

児童: Thank you. What animal do you like?

ALT: I like cats.

児童: Thank you. (既習の表現で質問が続く)

HRT: 他に〜先生に聞いてみたいことはない?

児童: 恐竜って何ていうの?

この場面では、HRTが“dinosaurs”という表現がうかばずジェスチャーや絵などを使って一生懸命に伝えようとしていた。参観者が“dinosaurs”と助け船を出したために、そのまま授業は流れていっ

たが、私はこの児童の言いたい気持ちやHRTの伝えようとする姿を見せることが大切だと思う。全知全能の教師ではなく、共に学ぶ姿を見せることでことばや文化の広がりを児童と教師が体験的に共有できるのである。

授業内外で継続的にHRTや児童がALTに“How do you say ... in English?”と聞くこと、ALTが“How do you say ... in Japanese?”と聞くことが、お互いのことばや文化に興味を持ち、言いたこと、知りたいことを広げていく姿勢につながるのである。

6. 指導者間の知識共有の場設置を

これまでの私の経験の中で小学校の先生方はそれぞれの専門に加え児童の生活や学習に関わる広い知識をお持ちであると思う。しかし、実際に授業に利用できるようにアレンジすることは多忙な教師にとっては大きな負担でもある。現在は、インターネットなどでもこうした情報は得られるのだが、その真偽に関する問題点も大きい。大学や出版社など信頼できるサイトに様々な実践例と共に文化やことばの広がりを表す知識の共有ができる場の設置が求められる。

また、児童間での情報共有も大切である。「他の友だちはどんなことに興味を持っているのだろうか?」、「どんな表現やことばを知っているのだろうか?」こうした問いかけが児童の学習意欲を高めていくことになる。

7. おわりに

外国語活動を通して、児童は様々なことばや文化への知識をふくらませることができる。その広がりは無限である。「教師は絶対的な全知全能の存在である」という意識からの脱却を図り、共に学ぶ存在として、外国語活動を楽しむ姿が必要であろう。教師自身がことばのおもしろさや深さを体感できたときに、それを児童にも感じさせる場を提供できる。そして、それが生涯学習も含めた将来の継続的なことばの学習へとつながっていくのである。